



# アメリカ浄土真宗に学ぶ

Takashi Miyaji さんへのインタビュー

## 第2回 同性婚をめぐる

『宗報』（七月号）では、「アメリカ浄土真宗に学ぶ①」と題して、ミヤジ・タカシさんにお話しいただきました。今回は、「同性婚」の問題を中心にお話しいたします。日本においても、同性婚の問題がしばしば取り上げられるようになりました。私たち念仏者は、このことをどう受け止めるべきでしょうか。同性婚で悩みを抱える人びとと共にこれまで歩んできたアメリカ浄土真宗に学ぶことで、私たちの未来について考えたいと思います。尚、インタビューは前回に引き続き、藤丸智雄（本願寺派総合研究所副所長）が務めます。

藤丸 前回、アメリカ浄土真宗の「倫理」をめぐる課題について、お話を伺いました。アメリカ社会で宗教として認められるためには、戦争や妊娠中絶、LGBT（レズビアン、ゲイ、バイ・セクシャル、トランスジェンダー）など、社会にある現実的課題について積極的な発言や行動が不可欠で、本願寺派のBCA（Buddhist Churches of America 米国仏教団）もこれらの問題に積極的に発言をしてきたことをお話しいただきました。そのことを受けて今回は、今、日本で

もしばしば注目されるLGBTの問題、その中でも同性婚をめぐる内容を中心に、より具体的なBCAの取り組みなどについて、お聞きしたいと思います。

### アメリカ社会と同性婚

宮地 〉BCAはこれまで四〇年間ほど、同性婚（Same-sex marriage）を認める立場をとり続けてきましたが、アメリカ社会では今なお、同性婚に反対する人びとも少なくありません。二〇〇八年にカリ

フォルニア州が法的に同性婚を認めました。二〇一五年には、最高裁判所が同性婚を容認する判決を出しました（注1）。それでも、いまだに全米の一三州が反対している状況です。

こうした背景には、キリスト教があります。というのも、『聖書』の中で、明確に同性婚が禁止されているからです。これによって、「同性婚は悪だ」とか、「精神的な病だ」などと考えられ、彼らはいじめや虐待を受け、時には殺されたりもしてきました。政治においても、保守的な人びとはキリスト教を基盤として政治を動かそうとしています。同性愛には厳しく反対しています。保守派は、「同性愛は自然なものではない」「神が定めた法ではない」から反対すべきだと言っています。こうした状況に当事者は堪えられず、精神的な苦痛によって自死してしまうケースも多数報告されています。

六〇年代の革新運動 宮地 〉転機が訪れたのは、一九六〇年代でした。この頃、学生運動やヒッピー文化に象徴される文化的な革新運動がアメリカで起きました。戦後から六〇年代に至るまでのアメリカは、経済的に裕福な時期で、黄金時代（Golden Age）と言われていましたが、他方、権力者が強大な力をもって、力によって政治を行うような実態がありました。それに対する反発

が起こったのです。六〇年代は、ベビーブーム世代にあたる若者の数が非常に多かったため、彼らは数の力で反発しました。その時、議論された問題の一つが、ジェンダーアイデンティティー（自身の性別に対する認識）でした。ベトナム戦争や人種差別の問題とあわせて、性的少数者に対する抑圧を批判しました。六〇年代以降も、保守派は引き続き反対し続けてきましたが、革新的な人びとは、「同性愛こそ自然現象だ」と主張し、「憲法」に平等の権利がうたわれている



Takashi Miyaji (宮地 崇)

一九八四年アメリカ・ユタ州生まれ。二〇〇六年、カリフォルニア大学バークレー校哲学科卒業。この間、慶應義塾大学へ一年間留学。二〇一一年、IBS（米国仏教大学院）修士課程修了。二〇一三年から二〇一六年まで、龍谷大学大学院修士課程及び博士課程に在籍。現在、本願寺派総合研究所臨時職員、龍谷大学研究生の傍ら、浄土真宗聖典英語翻訳委員会でも携わる。

2013年 B C A セミナーのチラシ「Over the Rainbow」

ので、これに従わなければいけない、と主張し続けています。現在では、科学が同性愛を自然現象だと後押ししたこともあり(注2)、ここ一〇年くらいで同性愛を認める動きが盛んになってきました。

### B C A の同性婚への対応

宮地〈二〇〇八年にジョージ・タケイ (George Takei) とらう、『スター・トレ

婚のことを改めてしっかりと考えているというところで、セミナーが開催されたのです。ちなみに、ハワイ教団でも同じようなセミナーを行っているようです。

### B C A の同性婚への取り組みの背景

宮地〉ところで、なぜ B C A ではキリスト教などの他宗教に比べて、同性愛者を受け入れやすかったのでしょうか？ このことについて、ジェフ・ウイルソンというカナダの大学の先生は論文の中で、組織的 (institutional)、歴史的 (historical)、教義的 (doctrinal)、とらう三つの視点から論じています。

まず、組織に関する理由です。組織面から見ると、仏教がアメリカに渡った時、お葬式や法要の行事だけではなく、誕生日や結婚式、またはハロウィーンやバスケットボールなど、宗教的な内容以外にも、コミュニティセンターのような役割をお寺が担うようになりました。このような公共性の高い役割を担ってき

「シリーズに出た有名な俳優さんが、ロサンゼルス別院で同性同士の結婚式を挙げました。これは全米の数々の新聞やテレビ番組で報道されました。ジョージ・タケイ氏は、ケネス・タナカ先生 (武蔵野大学教授) の『Ocean』(オーシャ

ン、日本語版は『真宗入門』法蔵館、二〇〇三年) という本を読んで影響を受けたようです。また、別院の日曜学校で、「われわれは海のようにあつて、一つの波なんだ」と教わり、個人差はあるけれども、みんな一緒のオーシャン (海) にいる、という考え方にとても共鳴したそうです。 B C A では、二〇〇四年と二〇一三年に同性愛者に関する二つの決議を行いました。一つは、同性婚に「反対しない」

たことが、多様な人びとを受け入れる素地を作ったのだということです。

次に、歴史的な理由についてです。戦時中、日系人たちは抑留キャンプに送られて、白人たちから激しい差別を受けました。その際、多くの権利や土地なども没収されました。砂漠の抑留キャンプに行かされて、三、四年くらい生活をさせられたのです。そういう経験をしているから、同性愛者などの少数派の人びとに対しても、シンパシー (同情) を感じることがあると考えられています。

鮮明に覚えています。九・一一の時、同時多発テロの直後、アメリカ在住のイスラム教徒たちは大変な差別に遭いました。テロの犯人のような扱いを受け、彼らはとても苦しみました。その時、日系アメリカ人のコミュニティが積極的に彼らに手紙を送るなどして、「われわれは一緒のアメリカ人だから、一緒に頑張っていこう」というサポートを行ったのです。最近では、大統領候補のドナルド・トランプ氏が、イスラム教徒に対し

「この立場を表明し、政府が下す同性婚を否定するような法律には反対する」という決議です。もう一つは、ボーイスカウトに関して、同性愛者であることが分かったら、辞めさせるという方針をボーイスカウトの本部が出したのですが、これに対して B C A は明確に反対することを決めました。これら二つのことを正式に決議したのです。

あと、カリフォルニア州バークレーにある浄土真宗センターでは、二〇一三年に L G B T に関するセミナーを開催しました。これは、桑原浄信先生のプロジェクトだったと思います。この年の六月、「伝統的な男女の結婚しか本当の結婚と認めない」とした結婚防衛法 (Defense of Marriage Act) とらう連邦法に対して、アメリカの最高裁判所が「違憲」と判断しました。長い年月、同性婚への対応は各州の判断に委ねられていましたが、ここで最高裁判所が明確に同性婚を容認したということは、大きなニュースになりました。これを受けて、 B C A でも同性

て、彼らを排除するような発言をしていますが、日系人たちはまた彼らのサポートをする運動を行いました。やはり、痛みを経験したことが、痛みに共感する価値観を生んでいることだと思えます。

最後に、教義的な理由です。親鸞聖人は、「非僧非俗」という生き方を大切にされましたね。出家して娑婆を離れる生活ではなく、現実世界に身をおいて、お念仏を喜びながら民衆と共に歩きました。その中で、恵信尼さまと出逢われ、結婚もされました。このような生き方をされた親鸞聖人を宗祖と慕う私たち浄土真宗の念仏者は、アメリカにおいても、他宗派に比べて、人びとから身近に感じてもらうことができたと考えられているのです。

さらに、ある開教使の先生が、『歎異抄』の中に、あらゆる生き物は、「ファザー、マザー、ブラザー、シスターである」、つまり「父母・兄弟なり」と示されていることに注目し、やはり、阿弥陀

さまのもとでは皆等しく救ってくださいから、そのお救いをいただく私たちも、性的少数者の人びとも受け入れるべきだ、と指摘されました。

## 「十方衆生」への救い

宮地 言うまでもなく、第十八願に示されるように、阿弥陀さまのお救いは、「十方衆生」、すなわち人種や性別、国や地域を越えてすべての人びとに届けられるものです。もちろん、個々人の性別や思想、感情の違いによって、救済の対象から漏れてしまうことなどありえませんが、だとして、当然、同性愛者の人たちもそこから排除されることはないのです。

二〇一三年のセミナーの最後に桑原先生が述べられたことがすぐ記憶に残っています。それは、差別を受けてきている性的少数者の人たちを受け入れるべきだけれども、同時に、彼らに対して批判的な立場の人たちも、やはり受け入れる

べきだ、という内容でした。つまり、立場を同じにする相手とも、異にする相手とも、等しく共に歩んでいくということが、社会問題に関わる際の念仏者の姿勢として重要だということです。

阿弥陀さまの救いをいただく私たちは、「排除しない」という態度を、日頃から心がけることが大切ではないか、ということを感じました。

藤丸 ありがとうございます。お話しただきました内容を受けつつ、さらにお聞きしていきたいと思えます。一つは、LGBTに関して、これが医学や自然科学の発達によって、病気や性的嗜好の問題ではない、ということが明らかになってきています。

このように、仏教が同性愛を受け入れるようになった背景には、科学の存在があるのでしょうか？ それとも、科学によって明らかになる前の段階から、そういう兆しはあったと見ることができのでしょうか？

芸術などの世界でタブー視されなくなったことも、同性愛者が声を上げられるようになった要因だと考えられます。

藤丸 その当時、BCAでは同性婚をめぐってどのような議論がなされたのでしょうか？

宮地 実は当時、BCAの中で時間をかけて議論したという形跡がほとんど見あたりません。おそらく、「教義的にも同性婚を否定する内容は見あたらない」という理由などをもって、認めていったのではないのでしょうか。

七〇年代、法律上で同性婚は全く認められていませんでした。そうした状況の中で、「苦しむ人びとを受け入れたい」という想いが先行していたのかもしれない。「認めて欲しい」という願いを、BCAは積極的に受け入れていったのだと思います。

もう一つ重要な点は、当時、BCAのお寺がコミュニティーセンターとして開

かれた役割を担っていたということですね。日本からアメリカにやってきた人たちが集う場所、彼らの日常生活をサポートする場所として、お寺が機能していました。まさに人びとの生活全般に関わる仏教の姿だと思えます。お葬式はもちろんのこと、誕生日や結婚式など、あらゆる場面でお寺が活用され、異国の地で苦悩を抱えながら生きる人びとと共に歩んできたのです。こうした歴史が、人びとの苦しみを受け止める力を養い、BCAが同性婚で苦悩する人びとを受け入れる結果につながったのだと考えます。

藤丸 宮地さんのお話の中で個人的に興味があったのは、大戦中の抑留キャンプのことです。真宗・仏教・日本人・日系人が排除されるマイノリティ側だったから、ある面、そういう偏見に気付きやすかったし、その経験が真宗、あるいは日系人全体の財産になっている、精神的な豊かさになっている、という指摘ですね。事実、それが九・一一の時、マイノ

宮地 前段階からあったと思います。一九七〇年代に、初めてお寺での同性同士の結婚式が行われましたから、やはり科学の進展いかんにかかわらず、少なくともアメリカでは仏教は性的少数者に対して寛容な立場をとり続けてきたと言えるでしょう。

藤丸 社会状況から考えると、キリスト教は同性同士が付き合ったり結婚したりすることに對して、教義の観点からも非常に認めがたい。そういう勢力が強い時期には、なかなか自分が同性愛者であると表明すること自体が難しかったろうと思うんです。一九七〇年代に、お寺で同性愛者同士の結婚式が行われたということは、少しそれが表に出せるようになってきた時代ということなのでしょう

宮地 確かにそうですね。あの頃から、映画などでも少しずつ同性愛に関する内容が描かれるようになりました。映画や

リテイの人びとをサポートする行動に結びついたということだと思います。

宮地 そうですね。先ほども言及しましたが、今、ドナルド・トランプ氏がイスラム教徒に対して排他的な発言を繰り返していますね。こうした中、サンフランシスコ仏教会のコバタ開教使が、アジア系アメリカ人とイスラム教徒たちと一緒に会議を開いて、互いに学び合い、そしてイスラム教徒たちを正式にサポートすることを決定しました。やはり、少数派として歴史を歩んだ経験が、今、少数派の立場に置かれている人びとに対して自然と寛容な意識を生み出しているような気がします。

藤丸 ここは興味深いですね。そういう精神的な背景があることで、性的少数派コミュニティーに対するサポートが実現したという分析ですね。

ところで、第十八願の問題ですが、「十方衆生」＝「あらゆる衆生」という

場合、解釈によって意味が変わりますね。「十方衆生」を私たち人間のイメージに閉じ込めた場合、「十方衆生」が「限られた」衆生になりかねません。この中に、性的少数者が意識されることによって、初めて、「ああ、この人たちもこの第十八願の中に含まれているのだ」というふうに考えられるわけです。宮地さんのお話を聞くと、こういう現実の問題に関わることで、ご本願ももっている意味というのが、すごく実感されるような気がします。

### 浄土真宗に求められるもの

藤丸 先日、深夜のドキュメンタリー番組で、同性愛の方が出てきてお話をされてきました。それは、非常に悲痛な言葉でした。家族にも友人にも打ち明けられない。親は、「なぜ結婚しないんだ」と迫ってくる。それに対して本当のことを言えなくて、ずっと苦しんできた、ということと告白されていました。

しょうね。

藤丸 本日は、LGBTの問題、BCAのLGBTへの関わりの歴史について、お話していただきました。お話を聞いていてある法律家の方がおっしゃっていた「法律が宗教を作ることはないが、宗教が法律を作ることあります」という言葉を思い出しました。社会にある課題に対して異なる価値を発信していくことの重要性を、改めて実感しました。本日は誠にありがとうございました。

(本願寺派総合研究所 教団総合研究室)

本願寺派では、宗制の中で「自他共に心豊かに」という理念を掲げていますが、私たちは、彼らの苦しみや辛さに寄り添っていきけるのか、ということが問われているように感じます。

宮地 そうですね。日本でも、真宗が性的少数者の人たちに対して、「ウエルカムですよ」ということを言えたら、すごく大きなインパクトを与えられると思います。それは、同性愛が否定される風潮の中で、苦しむ人たちにとっても大きな救いになりますし、一般の人たちもそれを見て、「真宗は人びとの苦しみや辛さに寄り添う宗教なんだ」と思うでしょう。厳しい言い方ですが、社会の風潮が変わってから、「私たちも認めます」と言っても遅いです。今、まさに目の前の苦しむ人と共に歩むことが、求められていると思います。

藤丸 海外に行くときよく分かるのですが、日本のように見た目の同一性が高い

国って、そんなにありませんね。アメリカに行けば、普通にヒスパニック系も、アフリカ系も、アジア系もいる。そういう中で、それぞれ違いがあるということが社会の前提にあると感じます。

もちろん、日本社会だって個人はバラバラで、全然違うはずなのに、日本人は互いの似通った面ばかりに目が行ってしまふ。異なっている人たち、違う立場の人たちがいるということに、少し意識が希薄きはくなのかもしれません。第十八願の「十方衆生」が、「あらゆる同じような人びと」ということではなくて、それが「あらゆる違った者同士」ということなんだ、という視点が重要じゃないかと感じました。

宮地 そうですね。宗制でうたわれる「自他共に」の「他」とは、決して「同質な者同士」ばかりでないという視点が、とても大切だと思います。そのことを大事にして、社会に対してメッセージを出していくことが求められているので

注1 二〇一五年六月二十六日、アメリカ合衆国最高裁判所は、「法の下の平等」を

定めた「アメリカ合衆国憲法修正第十四条」を根拠として、すべての州での同性婚を認める判決を出した。

注2 同性愛は、かつては医学的治療の対象として分類されていた時代も存在したが、WHO（世界保健機関）が一九九三年に発表した「国際疾病分類」において、「同性愛はいかなる意味でも治療の対象とはならない」という宣言が行われるなど、現在では医学的治療の対象から除外されている。